

# 上海大学時期の瞿秋白について（中）

陳 正 醜

はじめに

一、上海大学

二、上海大学における瞿秋白

（以上、前号）

三、上海大学時期の瞿秋白の社会哲学・社会科学関係の論著について

（本号）

四、「マルクス主義理論家」としての瞿秋白

上海大学時期の瞿秋白について（中）——陳

## 三、上海大学時期の瞿秋白の社会哲学・社会科学関係の論著について

一九二七年初、瞿秋白は、一九二三年から二六年にかけて発表もしくは執筆した著述を集めて、《瞿秋白論文集》を編集している。四・一二クーデターが勃発したために、結局は陽の目を見ることはなかったものの、保存されていた原稿の目録を通して、我々は、瞿自身の手による、彼の著述の分類整理案を知ることができる。<sup>①</sup>

八章が立てられているこの分類を、さらに、性質の同等のものをまとめて整理すれば、一、中国国民革命の問題、二、帝国主義と中国、三、時論、四、世界社会革命の問題、五、マルクス・レーニン主義の理論問題、六、文芸雑著の六種となる。時論と文芸雑著を除いて、他は広義の「理論的著作」に属するものが含まれているが、そのうち一、二、四は、いずれも革命運動を対象とするものと言える。それに対して、主義・理論そのものを対象としている論稿を集めているのが、五の「マルクス・レーニン主義の理論問題」である。瞿秋白は、この項目をさらに、(一)唯物論と社会科学、(二)レーニン主義と現代革命、(三)国家と民族の問題、(四)現代東西文化の問題、の四つに分けている。この(一)に含まれている著述が、いわゆる社会哲学・社会科学分野の論著の中心をなすものに他ならない。もっとも、「マルクス・レーニン主義の理論問題」に含まれるその他の項目のテーマの中にも、国家論や民族問題、レーニン主義など、広義の「社会科学」分野と見なしうるものがある。具体的な論著としては、〈国法学与劳農政府〉、〈現代民族問題講案〉、〈列寧主義概説〉などが挙げられるであろう。このうち、〈現代民族問題講案〉(一九二六年一月)は、瞿秋白が正式のスタッフでなくなつてからのことではあるが、上海大学で行なつた講演である。また、瞿の上海大学在職時期に執筆された論文としては、〈国法学与劳農政府〉(一九二三年八月)を始め、〈現代文明的問題与社会主義〉(一九二三年一月)、〈列寧与社会主義〉(一九二四年三月)、〈泰戈爾的国家観与東方〉(一九二四年

四月)の四篇が、瞿自身によって「マルクス・レーニン主義の理論問題」の(二)から(四)の項目に割り振られているものである。さらに、革命論として書かれている論者の中にも、瞿秋白の「社会科学」・「社会哲学」の実相を捉える素材となるものもある。例えば、〈東方文化与世界革命〉(一九二三年三月)は、瞿の分類では「中国国民革命の問題」に入れられているが、東方文化論のみならず、「社会」に関する彼の見解が示されている論文とも言える。また、同じく「中国国民革命の問題」中の〈中国資産階級の発展〉(一九二三年六月)や、「世界社会革命の問題」の項目の下のソ連経済政策を取り扱った一連の文章からは、瞿の経済学方面の理論に関する知識や理解のありさまを窺い知ることが出来るかも知れない。

これらはすべて、瞿の社会哲学・社会科学の思想内容の分析を行なう場合には視野に入れるべきものであろう。だが、本稿では、ひとまず瞿秋白の分類基準に沿って、狭い意味での社会哲学・社会科学理論そのものを主題として執筆された論著を対象範囲と定めることにする。

瞿秋白が「五」の第一項に収録しようとしていた論著は、〈自由世界与必然世界〉、〈実験主義与革命哲学〉、《社会科学概論》、〈唯物的宇宙観概説〉、〈馬克思主義之意義〉の五点であり、〈社会哲学概論〉、〈現代社会学〉の二作は含まれていない<sup>2)</sup>。しかし、〈論文集自序〉の瞿自身の記述を待つまでもなく、これら上海大学での講義がこの分野に該当する著作であることは、明白である<sup>3)</sup>。

一方、上記の諸論稿のうち、〈唯物的宇宙観概説〉と〈馬克思主義之意義〉の二篇は、他の論著と同様に、瞿秋白の捉えていた「マルクス主義理論」の重要部分を示すはずのものであるが、いずれも一九二六年執筆の作品であって、上海大学時期のものではない<sup>4)</sup>。したがって、ここで主として扱う文献は、〈社会哲学概論〉、〈現代社会学〉、《社会科学概論》の「三部作」を中心に、〈自由世界与必然世界〉、〈実験主義与革命哲学〉の二論文を加えた五篇となる。

本章での作業の根底にある目標の第一は、これらの社会哲学・社会科学関係の論著の執筆に当たって、瞿秋白が参照・利用した諸文献をできる限り把握し、これらの文献からの影響関係を明らかにするとともに、置かれる。こうした事実関係の吟味を抜きにしては、瞿秋白の論著の意義をマルクス主義思想史の中に定位することが困難であり、定位しようとしても思弁的な議論に陥らざるを得ないことは、贅言を要しまい。

瞿秋白が利用した文献を特定する作業は、中国の研究者によつてすでに部分的に着手されているものの、まだまだ十分な進展を見ていない。瞿秋白の論著に対する先行マルクス主義理論家からの影響をめぐつての、中国における研究の中で最も注目に値するのは、季甄馥の仕事である。彼が力説しているブハーリンやプレハーノフからの影響という指摘は、とりわけ、ごく最近まで「社会主義国」の研究者たちを束縛してきた、この兩名の思想に対する政治主義的禁忌の事情に鑑みれば、かなりの前進であることは疑いない。しかしながら、瞿秋白が利用・参照した文献については、季の場合にしても、必ずしも綿密な調査が行なわれているとは見受けられない。

上海大学時期の社会哲学・社会科学関係の論著において瞿秋白が参照・利用した文献は、すでに指摘されているよりも多種類である。本稿では、従来ある程度探究されてきた〈社会哲学概論〉、〈現代社会学〉について、今まで言及されてこなかった文献からの参照・利用の事実を明らかにする。また、これまでこのような角度からの光を当てられていなかった他の著作についても、依拠文献の存在を指摘する。これらの作業は、瞿秋白の受けた「思想的栄養の土壤」とでも言うべきものについての理解を——なお不十分ではあるにしても——より深め、より正確なものにするのに役立つに違いない。

利用・参照文献の特定という基礎的作業がもたらす効用のもう一つの側面は、瞿秋白自身の問題意識に接近する可能性である。すなわち、原文献との対比を通して、瞿の著作の中に「マルクス主義理論文献の限りなく翻訳に近い単

なる紹介」以上の意味、そうした紹介作業の範囲を越えて彼が抱いていた関心の所在を探り出しうるであろう。同様に、ここからは、彼が吸収した思想的栄養との関連や相違を含めて、瞿の思考の特質の一端を知る手がかりも得られるであろう。これは、本章の作業の根底にある第二の目標でもある。本稿では、この点に関する本格的な検討を進めるわけではないが、そうした探究の第一歩となることを目指したい。

### ○社会哲学概論<sup>⑤</sup>

《社会哲学概論》は、後述の《現代社会学》と共に、《社会科学講義》（二―四集、一九二四年一―四月）の中に収められたものである。

《社会科学講義》は、「上海大学社会科学会」という団体の編集、上海書店の発行で刊行されているが、実質的に上海大学の社会学系の講義録の性格を持っていたと言つてよい。ここには、瞿秋白の二著作の他にも、施存統の《社会思想史》《社会運動史》《社会問題》、安体誠の《現代経済学》が含まれていることがわかるが、これらはいずれも、既述のように彼らの上海大学における担当科目であった。また、《社会科学講義》の編集責任者が瞿秋白であったこと、第一集から第四集までが一九二四年三月から六月にかけて再版されたことも伝えられている。第五集以降は刊行されなかつたと見られ、《新青年》に掲載された広告によれば毎月六種の講義を分載して年に十ヶ月、二年間で刊行終了の予定であったのだが、実際には計画の五分の一しか出版されなかつたことになる。中断の理由は不明であるが、瞿秋白の二種の講義についても、四集までに掲載されたものが完結した形ではなかつた可能性を窺わせる。このことは、後述するように両講義それぞれの内容面の分析からも裏付けられる。

《社会哲学概論》は、「緒言 哲学中之唯心唯物論」、「一 唯物哲学与社会現象」の二部分から成っている。後者

はさらに、「総論」、「第一 哲学」、「第二 経済」、の三部分に分かれている。章立て構成からみて未完のものであると言う印象は拭えないが、「二」以降の部分が存在していたのかどうか、あったとすればどのようなものであったのかなどは、今のところ知る手がかりがない。少なくとも確言できるのは、「一」の部分すらも完結していないという点である。講義の予定としては、「第三」の項目として社会主義の解説に当たる部分が考えられていたことが推測できるからである。<sup>12)</sup>

総論、哲学、経済、社会主義という編成が予想させるように、「一 唯物哲学与社会現象」の部分は、おおむねエンゲルスの『反デュリング論』に依拠して書かれたものである。この事実については丁守和らがすでに言及しているが、〈社会哲学概論〉の「種本」は、この書物だけではない。「一」の中にも、部分的に『反デュリング論』以外のマルクス主義「古典」も利用し参照していると思われる箇所がある。そればかりでなく、「緒言 哲学中之唯心唯物論」に関して多くの先行研究者は全く注意を怠っているのであるが、この部分は実は、デボーリンの『弁証法的唯物論哲学への入門』に寄せたプレハーノフの序文を下敷にしたものに他ならない。<sup>13)</sup>

瞿秋白のマルクス主義哲学理解におけるプレハーノフからの影響については、前述の季甄馥の研究によって指摘されているところであるが、<sup>14)</sup> 上海大学におけるこの講義で、『反デュリング論』を手掛かりにマルクス主義理論の概説を試みるにあたって、彼が「緒言」としてプレハーノフの文章を利用したことは、この見解を確証する有力な傍証と言えるであろう。

マルクス・エンゲルス以後のマルクス主義の多様な系譜の中で、ロシア・マルクス主義の特徴は、何と云っても哲学（世界観、認識論等）に対する多大な関心ぶりにある。<sup>15)</sup> ここでは、マルクス主義哲学に対する様々な態度が現われたが、その中でプレハーノフは、マルクス・エンゲルスの文献の「祖述者」という姿勢を打ち出し、一貫して「正統

マルクス主義」の中心的論客であり続けた。彼は、マルクス主義の世界観を「弁証法的唯物論」として定式化し、自然哲学・社会哲学・社会主義理論すべてが不可分一体の体系であることを強調したのである。ロシア革命でボリシエビキが実権を握り、メンシエビキに属した彼が政治的には権威を失墜したまま死去した（一九一八年）後もしばらくは、彼の哲学理論家としての名声は揺るぐことがなかった。むしろ、ボリシエビキ内で優勢であったボグダーノフ等の哲学的「修正主義」の影響力に対抗する必要のあったレーニンにとつて、プレハーノフの著作と彼を継いだメンシエビキ内の「正統派」哲学者たちの存在は、一九二〇年代前半において心強い援軍としての意味を持っていたのである。一九二〇年代にプレハーノフの著作集が企画刊行されたのも、おそらくはレーニンの発議を受けたものと言われる。瞿秋白が最初にソ連に滞在した一九二一―二二年、および〈社会哲学概論〉を講義し執筆した一九二三年当時の、ソ連におけるプレハーノフの扱われ方はそのようなものであった。

哲学面でプレハーノフの学徒であったデポリーンの『弁証法的唯物論哲学への入門』も、一九二二年に国立出版所から再版されている。<sup>19</sup> 瞿秋白がこの書物を直接手にした可能性は、かなり高い。後述するように、彼は〈実験主義と革命哲学〉を執筆した際にも、デポリーンのこの哲学入門書の一章を利用してゐるからである。

瞿秋白が「哲学中之唯心唯物論」という見出しをつけたことからわかるように、プレハーノフの序文は、古代から近代に至るまでの唯物論哲学と観念論哲学との発展の歴史を概説したものである。最初の節で、著者は、哲学の根本問題を「我」と「非我」、「意識」と「実質」との問題であると設定した上で、これに対する見解が結局は二種類――すなわち「客観を出発点とする」唯物論と「主観を出発点とする」観念論――とに分けられるのだと主張する。<sup>20</sup> 最も一般的に見れば、プレハーノフの序文の主題は、意識と実在との関係の問題における唯物論と観念論との対立であり、唯物論の科学性・正当性を主張するところにあると受け取れよう。

しかし、プレハーノフの著述の眼目はそのような所にあるのではない。彼は、唯物論が科学的自然観に従い観念論がアニミズムの自然観に基づいている以上、その理論内容上の優劣は明白であると論じた後で、それにもかかわらず長い間観念論哲学が強い勢力を保ってきた事実を指摘して、その原因を社会思想的に探求しようとする。その場合の論拠となるのは、社会階級と社会思想との結び付きである。だが、プレハーノフが説くのは、一九三〇年代以降に勢力を得るような「二つの陣営の闘争」や直接的な階級利害の反映といった単純な図式ではなくて、むしろ、理論的には矛盾していながらも繰り返し登場する観念論哲学者についての、社会心理的原因の弁証法的な説明である。例えば、自由主義者が宗教を否定しながらも、下層階級への普及に恐れを抱く二面性を有しているがゆえに、意識的な欺瞞のみならず無意識的な欺瞞も働いて、徹底的な結論を回避する傾向に陥りがちであることが描かれている。<sup>21</sup>

「哲学中之唯心唯物論」とプレハーノフの「序文」とを比較対照するならば、部分的な省略や一部要約性の記述とされている箇所がある点、および十数ヶ所原文にはなかった記述が補われている点を除けば、ほぼ翻訳と言ってよいものであることがわかる。

省略箇所については、分量上も内容上も大きな意味を持つものはほとんどないと思われる。むしろ注意を要するのは、プレハーノフの「序文」には記されていなかった記述の方である。これらは、大きく見て三種類に分類される。一つは、中国の事例を付加したり具体的に言及したりしている部分。次に、語句の注釈や直前の文の解釈と言いうる次元の短い補足。最後に、プレハーノフが示した理論的観点を解説している、あるいは論の展開を補足している、比較的まとまった叙述。第一・第二が瞿秋白の言葉によるものであることは、ほぼ疑いない。第三種については、すべてが純粹に瞿自身の表現であるのか、それとも何らかの別の依拠文献が存在しているのかどうかは、今のところ確言できない。だが、いずれにしても、原文になかった記述が加えられていることは、瞿秋白の特別の関心の所在を



知る手掛かりと考えてさしつかえないはずである。同じことは、中国の事例に言及しているある程度の分量を持った叙述に関しても言いうることであるが、ここでは、第三の部類に限って瞿秋白の付加した内容について、〈社会哲学概論〉における「緒言」の役割との関連で、指摘しておきたい。

該当する記述は五ヶ所あり、その内容は次の通りである。①「哲学」の定義。②新しい社会思想が発生しその担い手たちの内部で分化が生じる過程と社会階級との関係。③唯物論的自由思想を徹底させることのできない「上流階級」が反動的観念論を産み出すこと。④唯物論は精神現象を否定するのではなく、むしろそれを説明できること。⑤宇宙についての総概念、すなわち唯物主義的・弁証法的哲学を確立することが、社会現象をはっきり研究する前提となる、という主張。

②と③は、ブレハーノフが論じていることを瞿秋白がわかりやすく敷衍して、論旨の把握を容易にするために付け加えた一面もなくはない。だが、そうだとしても、ここで補われている観点こそがブレハーノフの原文の主題であったことを考慮すれば、瞿はそれを十分確認する必要性を感じたと解釈することは、不適切ではあるまい。換言すれば、彼はブレハーノフの文章から、社会思想の変化の社会階級との関連での把握という手法を汲み取り、読者に特に伝えようとした、と見なすことができるわけである。

①と⑤から看取できることは、瞿秋白が、「宇宙についての総概念」、つまり一種の「根本観念」の確定を重要視した点である。哲学は、「人間の宇宙に対する認識」、「人生の当然の知識に対する態度」であるのだが、それは同時に、社会現象の研究にとっての方法論・道具となり、かかる観点を有するか否かが「現実」派と「空想」派との分かれ目であると考えられているのである。唯物論は、結論的に受け入れるべき「正しい」世界観としてでなく、社会現象の探求の確かな出発点となる観点として、また、方法的に依拠する考え方として重視されるのである。しかも、唯物

論と観念論との対比を基調とするプレハーノフの記述を受けた結びでありながら、⑤で、単に唯物論的というだけでなく「互弁律」(弁証法) 的哲学であることも指摘されていることは、注目に値しよう。<sup>23)</sup> もちろん、方法論重視の主張は『マルクス主義の根本問題』などを通して知られるプレハーノフの論とも一致しているが、瞿秋白が一連の著作で繰り返し強調している事柄である点を考慮すれば、より強く瞿個人の動機に裏打ちされた主題であったと理解すべきであろう。

次に、「一 唯物哲学与社会現象」の部分であるが、既に触れたように、その「総論」、「第一 哲学」、「第二 経済」の各章はおおむね、『反デューリング論』の「序説 一 総論」、「第一篇 哲学」、「第二篇 経済」にそれぞれ対応している。<sup>24)</sup> 叙述スタイルの上では、原著にあるデューリングの著書に対する批判の文言はいっさい盛り込まれず、もっぱら、それぞれのテーマに関するマルクス主義の理論的立場の要点を正面から展開する形を採っている。また、各単元ごとの『反デューリング論』との対応関係を調べてみると、構成上、必ずしも『反デューリング論』そのままではなく、第二篇まででも省略されている章節もあれば、別々の章節にあった記述を集めて組み合わせられている箇所もある。また、原著の記述をほぼそのまま借用しているものでもなければ、パラフレーズした形で叙述しているものもない、つまり、『反デューリング論』とは対応していない部分もある。その中には、例えばエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』など、マルクス主義文献を含むその他の文献をも利用・参照していると思われるものもある。<sup>25)</sup>

要するに、〈社会哲学概論〉は、『反デューリング論』を中心にしたマルクス主義理論のポイントを瞿秋白自身の理解に即してまとめたもの、とすることができると言える。<sup>27)</sup> その理解の枠組みの基本は、マルクス主義を宇宙観・人生論を含む包括的な体系として把握し、そうした根本的世界観と歴史観——社会哲学——とが、社会のこれからの発展の道筋——社会主義——の把握の前提となる社会現象の「解釈」にとって欠くことのできない方法論である、という所にあっ

た。

『反デューリング論』とは対応していない記述を網羅的に取り上げるのは煩瑣にすぎる。ここでは、「緒言」に示された方法論の重要性の強調との関連で注目し値する一点だけを指摘するに止めたい。

それは、「総論」部分に現われる、科学的社会主義とユートピア的社会主義との違いを論じているくだりである。〈社会哲学概論〉の中で瞿秋白は、「哲学理論が正確かどうかは社会現象の方法論における根本問題である」と指摘した上で、ユートピア社会主義の欠点について次のように述べる。彼らは旧時代の精神を徹底的に破壊できたけれども、客観的社会生活の現実に密着できなかったために失敗した。「社会がどのようであるべき」か知らず、社会研究がどのように発展「している」かを知らなかった。当然「このようである社会」からどのようにして「かくあるべき社会」に進んで行くかは、なおのこと知らなかった。」すなわち、ユートピア派が空想的であった所以は、彼らが社会哲学（＝社会を研究する方法）を変更しなかったところに求められるのである。<sup>28</sup>

ユートピア社会主義が資本主義を批判はしたが、それを説明することが出来ず、従って社会主義にいたる道筋を描き出せなかった、という趣旨の議論は、エンゲルスも行なっているところである。<sup>29</sup>しかし、瞿秋白のこの表現は、『反デューリング論』のそのくだりと同一ではない。そればかりか、瞿は一步踏み込んで、独自の二つの観点に力点を置いているように思われる。その第一は、方法論として機能する基本観念の決定的役割を強調する姿勢である。この点は、「緒言」で繰り返し表明されたものと一致しており、贅言を要さない。もう一つ注意すべきなのは、「べき」すなわち当為性にかかわる願望や意志と、「である」や「している」すなわち存在それ自体の事実性・現実性とを強調して対比し、後の態度を「科学」と結び付ける発想を覗かせている点である。これは、あるいは『反デューリング論』の関連箇所の実証主義的姿勢の敷衍であると考えられるかもしれないが、おそらくは瞿秋白の社会現象の実態、

社会の「現実」を「ありのまま」に把握することに対する強烈な関心が導いている観点と理解されるべきだと考えられる。<sup>(30)</sup>

### ○現代社会学<sup>(31)</sup>

瞿秋白の上海大学でのもう一つの担当科目の講義録〈現代社会学〉の場合も、その内容は基本的に翻訳に近いものであった。〈現代社会学〉が依拠していたのは、ブハーリンの著書『史的唯物論』である。一九二一年に出版され、一時期マルクス主義理論界の権威的文献としてもはやされたこの著作には、「マルクス主義社会学の一般的教科書」という副題が添えられていた。ただし、原著は八章からなる本文と序章とで構成されているが、瞿秋白が利用しているのは、第一章から第四章までであり、第五章「社会と自然のあいだの均衡」以下に当たる部分は含まれていない。また序章も、わずかに第5節「社会諸科学と社会学」の記述が〈現代社会学〉の第一章第二節の「六」の一部などに使われているに過ぎない。<sup>(32)</sup>

現在見ることでできるテキストでは〈現代社会学〉は五章から構成されているが、そのうち第二章から第五章は、逐一翻訳しているわけではないがおおむね『史的唯物論』に基づいて書かれている。そのうち第三章以降（『史的唯物論』の第二章以降）においては、省略される部分や要約性の記述が多くなっている。

一方、わずかではあるが、『史的唯物論』には述べられていないのに〈現代社会学〉に記されている部分がある。内容面から言えば、①例示としての中国古代の事象や古典の引証、②張君勱ら同時代中国の学者を批判しているもの、③特殊中国的な問題ではなく、一般的理論の次元でブハーリンの記述をまとめなおしたり補ったりしている箇所、に分けられよう。<sup>(33)</sup> ①、②は瞿秋白自身の言葉であることはほぼ疑いないが、③に関しては、他の何らかの文献を利用し

たものなのかどうか、詳らかにしない。

中国に関する記述は、中国社会思想の歴史と現状に対する瞿の関心度を物語っている。だが、彼のこの方面への問題関心をめぐる考察は、稿を改めて行なうことにしたい。

中国関係以外の付加部分で注目してよいのは、第二章第二節の末尾の部分の文章である。「合法性」に関する目的論と因果論のそれぞれの問題設定の特質を述べたこの節を、ブハーリンは、「因果論と目的論との議論はこのようなものである。われわれはまず第一にこの議論を解決する必要がある。」と結んでいる。だが、瞿秋白はさらにそれにかけて、次のように論じる。「さもなくば、社会学の研究は非常に困難となる。——と云うのは、現代でもまだ多くの学者が社会学を目的論だと考えたり、社会学における因果法則の有効性をまったく否認したりしている——社会学、とりわけ社会学を根本的に解消する——からである」。<sup>(3)</sup>『史的唯物論』の第一章（すなわち〈現代社会学〉の第二章）で、ブハーリンは社会現象の中に因果法則が見出せること、従って社会学が成立することを説いているのであるが、瞿は社会学ないし社会学の存在意義、すなわちその科学としての存立可能性というブハーリンのテーマに対して特に注意を促している形となっているのである。

ポリシエビキきつての理論家であったにもかかわらず、ブハーリンに対してはしばしば、マルクス主義理論の「異端的」解釈という非難がなされる。マルクス主義の史的唯物論を抽象的・一般的学問としての「社会学」として体系づけようとするブハーリンの野心的な試みに対しては、同時代の一部のマルクス主義者からの強い批判があった。また、『史的唯物論』における弁証法の「均衡論」的説明は、「修正主義者」という烙印を押されながらも当時のソ連思想界で依然として根強い影響力を保っていたボグダーノフとの理論的親近性を指摘される根拠となっている。

だが、ブハーリンの「異端性」に関して見落とすことのできない重要なポイントは、彼が抱いていた社会科学全般

に對する幅広い學問的關心である。「史的唯物論」は、実は、マルクス主義理論の体系的概説であつたと同時に、マルクス・エンゲルス以後に發展したヨーロッパの非マルクス主義もしくは反マルクス主義的傾向を持つ社会学理論に對する、マルクス主義理論の擁護という目的をも抱えていたと言われる。<sup>35</sup>「ブルジョア社会学」との格闘の中で、その理論の成果を吸収しつつ、マルクス主義の側での総合的な社会理解の學問たる「社会学」を構想しようとする姿勢そのものが、多かれ少なかれブハーリン獨特の「マルクス主義」を形成する要因だつたのである。ステイブン・コーエンは、ブハーリンとボグダーノフとの眞の親近性を、むしろこの知的態度にこそ求めている。すなわち、彼によれば、彼らは共に、マルクス主義を開かれた思想体系と見なし、マルクス主義理論の範圍外の學問・文化の動向の受容を当然視していたのである。<sup>36</sup>

瞿秋白の付言は、社会学一般ないし社会科学一般に關する問題意識という意味では、ブハーリンの姿勢を汲み取つているものと言えなくもない。だが、この記述は、それ以上に瞿自身の固有の問題關心を窺わせるものと見るべきであらう。と言うのは、瞿秋白の社会科学ないし社会学への關心の深さは、実は、ブハーリンの原著と最も対応度の低い第一章の構成に、より顯著に示されているからである。

〈現代社会学〉の講義に際して、瞿秋白は、基本的に「史的唯物論」に依拠していたにもかかわらず、第一章だけはブハーリンの「序章」をそのまま使わなかつたことは、興味深い事実である。この点については、中国の研究者はほとんど注目していない。<sup>37</sup>

ブハーリンの序章は、「社会科学の實踐的意義」と題されているところからもわかるように、主として、「プロレタリア社会科学」の存立意義の問題を扱っている。そこでは、労働者階級の闘争との關連で社会科学の役割が説かれ、社会科学の「階級性」が述べられ、「ブルジョア科学」に對する「プロレタリア科学」の優位性が主張されている。

それに対して、〈現代社会学〉の第一章は、「社会学之対象」と題された第一節と、「社会学存在之根拠」という第二節とからなっており、「社会学」の科学としての存在意義を説くことに重点が置かれている。すなわち、社会学が取り扱う対象は何であるのか、そしてそれは、社会学という特別の科学を設けて研究しなければならないものなのかどうか、また、社会の種々の側面を取り扱う、他の社会科学との関係はどのようなものなのか、といった問題をめぐって論じられているのである。『史的唯物論』の「序章」の第5節が翻訳ないし要約されているのは、こうした立論の文脈上においてであり、経済学、政治学などの個別社会科学に対して、それらの諸分野間の関係および「全体」を扱う科学としての「社会学」の役割の主張が、そしてまた、同様に「全体的」な学問としての「歴史学」が社会現象を「縦」に見るのに対して、社会学は「横」に考察するという指摘が、利用されているのである。

〈現代社会学〉の第一章では、そのほかに、「社会学」一般とマルクス主義理論たる「現代社会学」との区別が、階級利害との関連で述べられている箇所がないわけではない。<sup>38</sup>しかし、その記述は『史的唯物論』を利用しないし参照したものではない。しかも、そうした概念としての「現代社会学」という言葉を用いているにもかかわらず、第一章の主題である社会学の研究対象と存在意義の問題に照らして見るならば、「社会学」一般のそれとは区別された「現代社会学」独特の研究対象や存在意義は説明されておらず、この章全体にとっては言わばつけたり程度の意味しか有していないのである。

この第一章の存在が示唆しているのは、瞿秋白が「社会科学」の存立可能性、なかんずく「社会学」の存立可能性という問題を扱った際には、ブハーリンとは相対的に独立に形成された、ある意味ではブハーリン以上に強い、彼自身の動機があったという点である。すなわち、瞿には、社会学という学術を把握し、自らのものにしようとする志向があったと考えられる。詳細な論証は別稿に譲るが、彼が繰り返し表明していた問題関心は（総体として想定されて

いる)「社会」現象の解明にあり、同時にその解明の「方法」にあった。前章で指摘したように、彼のこの強い意欲は、当初から中国の「社会思想」状況の混乱解消という願望とも結び付いていた。瞿秋白の上海大学での講義開始時点の中国の思想状況に照らして言えば、「東洋文化」「西洋文化」の議論を土台にし「社会主義」に対する賛否の態度を背景にしながら、まさに「社会科学」の存立をめぐって争われた「科学と人生観」論争に対して彼が見せた強い関心も、瞿固有の思想的営為の脈絡を示すものと考えられるのである。

このこととおそらく結び付くであろうが、さらに注意を要するのは、この章では、マルクス主義とは全く傾向の異なる文献をも参考に行っているものと思われる点である。

瞿秋白は、この第一章で多くの社会学者の学説を紹介・引用・批判しているが、そうした多様な社会学の学説に彼が精通していたとは思われない。おそらくは二次的資料に頼ったのであろう。残念ながら、現在までのところ、瞿が直接利用した文献を特定することはできない<sup>39</sup>。ただ、第一章第二節「社会学存在之根拠」の「二 社会学与理化科学」は、ロシアの社会学者ソローキンの何らかの著作に依拠している可能性が高い。物理学・化学等のアナロジとして社会学の諸学説を批判して、社会現象独自の研究方法の必要性を説いているこの項の中で、瞿秋白は数名の欧米の社会学者の所説とその著作からの引用を示しているが、その締めくくりに、ソローキンの著書『罪と罰 功と賞』の言葉を引いている。この本そのものを参照することはできなかったが、ソローキンの別の著作『現代社会学説』の中に含まれている記述に、瞿がこの項で取り上げている内容に相当程度一致する点がある。これは一九二八年に出版されたものであり、もちろん瞿秋白がここから引用したことはありえない。しかし、ソローキンは一九二二年にアメリカに亡命するまでに既にロシア語で(上述の『罪と罰 功と賞』をも含めて)複数の社会学関係の論著を刊行しており、その中にこの著作の当該箇所と同様の記述を含む文献があった可能性、そして瞿がそれらの書物ないし論文を



目にした可能性は排除できないであろう。

ソローキンの参照という可能性の傍証となるのは、〈現代中国所当有的 上海大学〉の中でもソローキンの名前をブハーリンと並んで取り上げている事実である。「社会学」の在り方を述べているこの文章で、瞿秋白は、総合的な性格の「社会学」を指向しており、その種の社会学説の代表者としてこの二人の名を挙げている。<sup>④</sup>この事実から見れば、ソローキンの引用の意味は、単に社会学説史を概説するために利用したというだけに止まらない。既述のように、ブハーリンは「ブルジョア社会学」との格闘の中で、総合的な社会理解の学問たる「社会学」をマルクス主義の枠内で構想したのであるが、ソローキンがブハーリンの『史的唯物論』をマルクス主義の著作としては興味を持てるとして好意的に受け止めたというエピソード<sup>⑤</sup>に示唆されるように、総合社会学の伝統を継承するという点ではソローキンとその軌を一にしていた。瞿秋白が感じ取ったのはまさにこの共通性であり、ソローキンの学説もやはり瞿自身が求めていた型の社会現象理解の姿だったと言ふべきであろう。<sup>⑥</sup>

### ○社会科学概論<sup>⑦</sup>

上海大学時期の瞿秋白のもう一つの主要著作である《社会科学概論》に関しては、前述の二作品のような依拠文献の存在が明らかではない。かなりの程度、瞿秋白自身のオリジナルの記述があるかもしれないが、〈社会学哲学概論〉や〈現代社会学〉の例から見て、何らかの下敷きがあった可能性も捨てきれない。

王観泉は、この著作が、モスクワ東方大学中国班での授業を基に出来上がったという推測をしている。<sup>⑧</sup>これは、一九二一年九月から瞿秋白が、当時中国から社会主義青年団に属する留学生が送り込まれていた東方大学で、通訳とロシア語の教授を行なった事実を踏まえての論である。しかしながら、この時、東方大学でどのような教科を学んでい

たのか、その際使用された教科書がどのようなものであったのかについては、この説を裏付ける根拠となりうるような確実なデータは全くない。<sup>46</sup> 王の推測を含めて、《社会科学概論》執筆に際して瞿が参照した文献の特定は、なお未解決の課題である。

したがって、本稿では、直接的利用という問題を離れて、この著作の理論的枠組みに対する影響関係を論じる上で基礎となる二、三の点について簡単に指摘しておくに止めたい。

《社会科学概論》の場合も、既述の二論著と同様に、まずプレハーノフおよびブハーリンとの関りを踏まえなければならぬ。

プレハーノフからは、下部構造と上部構造との関連、なかんずく生産力・生産関係と社会思想・社会心理との間の規定関係についての定式を受け継いでいる。すなわち、第二章「社会現象之聯繫」の冒頭で示される「社会の構造」図において、瞿秋白は、「生産力の状態」、「経済関係」、「社会制度」、「社会心理」、「社会思想」の五項目を挙げ、その相互の連関を論じているが、これは、プレハーノフが『マルクス主義の根本問題』等の中で、マルクスとエンゲルスの意見の要約として定式化した社会の「基礎」と「上層建築」との関係についての五項目の図式と、ほぼ同一である。<sup>47</sup>

一方、「所謂「上部構造」に属する各項目に関する記述は、ブハーリンの『史的唯物論』の第VI章（「社会の諸要素間の均衡」）で取り上げられている各項目を想起させる。《社会科学概論》では、第四章から第一章までが、政治、法律、道徳、宗教、風俗、芸術、哲学、科学に割り当てられている。これは、「社会の諸要素間の均衡」の中で上部構造に含まれる社会諸現象として、ブハーリンが列挙している項目——すなわち、社会の社会的・政治的構造、風俗、法律および道徳、科学と哲学、宗教、芸術、言語——に、言語を除いて対応している。<sup>48</sup> しかし、内容的には《社会科

学概論』の趣旨とブハーリンの著書の記述との間に、それほど強い結び付きを認めることはできない。<sup>(49)</sup>

《社会科学概論》で扱われている内容をめぐっては、上記の両名に加えてボグダーノフの影響、もしくはその所説との比較をも考慮しなければならないであろう。ボグダーノフは、レーニンを始めとするソ連の「正統」マルクス主義、とりわけ一九三〇年代以降の「哲学の党派性」を強調する一派によって、「修正主義者」としてロシア・マルクス主義の歴史から葬り去られてしまった観があるが、一九二〇年代にはなお相当の影響力を保っていた哲学者・社会科学理論家であった。<sup>(50)</sup> いわゆる「イデオロギー」（社会意識もしくは社会思想）の各要素に関して、この人物は「社会意識学概論」を書いている。この書物の構成は、瞿秋白の《社会科学概論》とは全く異なっていて、瞿が直接利用した文献ではないことは明白であるが、個別的な問題に関しては類似した観点が示されている所もある。例えば、宗教の発展に関してボグダーノフが重視している家長の権威および「祖先崇拜」による解釈は、ブハーリンの『史的唯物論』でも肯定的に利用されているが、《社会科学概論》における宗教の変遷の説明の中でも使われている。<sup>(51)</sup> また、「生産力の状態」の規定要因として、瞿秋白は「労働力」、「技術」、「自然」の三要素を挙げるが、これは、どちらかと言えば「地理的環境」を重視したブハーリンではなく、「技術」に重きを置くブハーリンおよびボグダーノフの考え方に近い。<sup>(52)</sup> さらに、瞿秋白が「哲学」や「科学」を論じる中で取り上げている労働と知識の関係および知識階級についての所説は、瞿自身の元来の問題意識と関連があることは言うまでもないが、同時代のロシア・ソ連でこの問題を重視していた人物が他ならぬボグダーノフであったことは、大いに注目をしなければならないものと思われる。<sup>(53)</sup>

○《自由世界与必然世界》（《新青年》季刊第二期、一九三三年二月）

この論文は、一九三三年二月から九月にかけて戦わされた「科学と人生観」論争に対応して書かれたものである。

瞿秋白の観点は、この論争の文脈では、社会現象の領域に全面的に——集団のみならず、個々人に対しても適合する——科学的法則を適用しうる、という「科学派」の立場にある。論争に関連する諸論稿を集めた《科学与人生観》の中では、その序文として書かれた陳独秀の文章がマルクス主義の角度からの主張を示しているものとして知られているが、理論的には、《科学与人生観》に収録されなかった瞿のこの文章の方が、数段明快にマルクス主義的世界観を開陳するものであったと言える。<sup>54</sup>

瞿秋白は、この論争の中心課題の本質が、「社会現象には因果法則が存在すると認められるか否か」、「意志の自由を認めるか否か」という点にあると捉えて、「必然」と「自由」の意味について論及している。<sup>55</sup>彼は、直接論争に参加して先行の論著の具体的論点に即して議論を進めるというスタイルではなく、自己の見解を体系的に叙述説明する中で論争における異なる立場の論者を批判する形をとるのだが、瞿の立論の基盤が、マルクス主義の観点に従って、社会現象の因果法則の存在とその把握可能性を認めるものであったことは、言うまでもない。その見解では、社会現象には「社会の究極的原因」たる「社会的実質」——「経済」に規定されることに由来する法則性があり、「自由」とは、この因果法則の「必然」性を知ることによってのみそれを応用することができる、という意味であるとされる。

論文の性質上、同時代の中国の思想家たちの言説を批判しているくだりなどを含んでいるが、それぞれの理論的問題点に関する立論においては、瞿秋白はおおむねマルクス主義の「古典」的書物に依拠している。しかも、そうした文献を全く明示することなしにそのまま引用している箇所がかなりある。とりわけ、最初の三節はその大半が原典からの直接利用によって構成されている。すなわち、第一節は、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』の一部分を記述したものであり、第二節の記述には、『反デューリング論』における「自由と必然性」に関する論述からの借用が見られる。さらに、第三節は、そのほとんどがプレハーノフの『マルクス主義の根本問題』の記述を利用している、

といった具合である。<sup>(56)</sup> 中国思想界の「科学と人生観」の論議に対する評論に際して、瞿秋白にとつての最大の武器は、ブハーリンの所論をも含めて、自由と必然性の問題および社会現象の法則性に関するマルクス主義の諸見解の要点を一通り把握していて、それらを縦横に活用できることだったと言えよう。

○〈実験主義与革命哲学〉(《新青年》季刊第三期、一九二四年八月)

この文章は、胡適らによって唱道されていたプラグマティズム哲学の批判を目的とするものであった。瞿秋白は、第一に、プラグマティズムが中国で受け入れられた背景を分析・批判し、第二に、プラグマティズムの世界観に対する理論的な批判を行なっている。

最初の部分の主旨は、中国近代のブルジョアジーの発展に伴う思想革命の要求からプラグマティズムが受容されたこと、しかしながらこの理論は欧米においては現状維持のブルジョア哲学にすぎないこと、科学的真理以外の価値をも認める多元的な改良主義であること、といった論断にある。第二の部分においては、プラグマティズムの哲学問題に対する独特の態度、すなわち有用性の観点からの問題の組み直しについて述べ、それが「実践」的態度につながる側面に関してその長所を認めた上で、プラグマティズムの欠点を、それが理論を軽視する、すなわち理論を単なる道具と見なし、理論そのものの客観世界との符合という真理性の側面を重視しないところ、そもそも「真理」に何等の価値も見出さないとともに求める。さらに、理論軽視の背後にある枠組みとして、多元論的世界観の存在を指摘する。また、プラグマティズムと弁証法的唯物論との相違について、前者が有用であるがゆえに真理であるのに対して、後者においては、真理であるもの——すなわち客観的現実世界に合致するもの——であるがゆえにそれが有用となる、と論じる。<sup>(57)</sup>

この論文のテーマは言わば「真理論」にあり、いわゆる「社会哲学」ないし「社会科学」とは、やや異なった次元の問題を扱っていると言えるかもしれない。しかし、弁証法的唯物論が、社会現象を研究する際の前提となる「方法論」として位置づけられていることに照らして見れば、やはり「社会科学」に関する文章であると考えることができよう。ちょうど、〈自由世界与必然世界〉が、社会科学における「客観的法則性」の成立可能性を、社会現象の内に含まれる「意志」の要素の問題を焦点として取り扱っていたのと同様に、この論文では、科学一般における一元的「客観性」の存立を観察主体の多元性の問題との関連で取り上げているわけである。

〈実験主義与革命哲学〉は、その大半が、デボーリン『弁証法的唯物論哲学への入門』の第二章「プラグマチズムと唯物論」を参照して書かれている。まず、全体の四分の三の分量を占める第二の部分は、ほぼ、デボーリンの著作の当該章の中心部分の前半部を訳出ないし要約したものとなっている。さらに、瞿の文章の最初の部分に關して見ても、中国の事情を述べる中で、あわせて一部デボーリンの文章の出だし部分を利用して見られる<sup>(58)</sup>。また、プラグマティズムの理論的見地の例示として、瞿秋白の文章にはしばしばジェイムスからの引用が現われるが、実はそれらも全て、デボーリンが引用している箇所の孫引きなのである。こうして、瞿の論文は、分量的にも三分の二程度はデボーリンに依拠しており、理論的主張においてもその大要をこのソ連のマルクス主義哲学者から受け取っているわけである。

A・M・デボーリンは、当時、押しも押されぬソ連マルクス主義哲学界の重鎮であった。ロシア革命前にメンシエビキに属していたために政治的には警戒されていたにもかかわらず、彼は、一九二二年以降共産党幹部養成学校で哲学の教鞭を執る。これは、「マッハ主義者」がむしろ主流を占めてきたポリシエビキ内には、レーニンが好ましいと見なす「正統マルクス主義哲学」を講じられる人材が乏しかったためでもあった。モスクワにおける中心的哲学者は

デボーリンとシ・アクセリロートであったが、彼らはいずれもプレハーノフの弟子であった。こうして、非党員（デボーリンの入党は一九二八年）でありながら、ソ連政権内で哲学指導者としての職務を与えられたデボーリンは、一九二五年段階までにすでに、研究・教育機関においても、また共産主義理論誌『マルクス主義の旗の下に』（Политический Журнал Марксизма）の編集においても、それらを実質的にコントロールするほどの地位を築いていたのであった。<sup>(58)</sup> 瞿秋白がモスクワに滞在していた間に、そうしたデボーリンの位置に着目していたことは、十分に想像しうる。また、理論内容面から言っても、瞿が特に興味を抱いた弁証法こそ、デボーリンが強調しかつ研究教育の中心に据えていたものであった。従って、彼が、一九二二年に再版された『入門』を弁証法的唯物論解説の権威的書物と捉えて利用したとしても、何ら不思議ではなかったはずである。

上海大学時期の瞿秋白の社会科学・社会哲学関係の論著全体を通して、その内容以前に、最も大きな特徴は、その大半に直接の参照文献があり、ほぼ翻訳・紹介と言いうる性質のものが多数を占めるという点である。後年の回想で瞿が告白している、上海大学での講義は「数冊の書物を翻訳したもの」<sup>(59)</sup>に過ぎないという言は、上述したような文献上の対応関係から裏付けることができよう。もちろん、翻訳であることや下敷きがあるという事実は、瞿秋白の思想営為の独自性を否定するものではない。瞿は、マルクス主義の「正統」と見なされる学説を中心に社会哲学・社会科学理論を吸収したには違いないが、同時に「異端」的なものやマルクス主義の範囲外の理論にも関心を寄せていた。それは、むしろ彼のもともと具えていた問題意識および思考方法の柔軟性と「アンテナ」の多方向性を示唆しているように思われる。<sup>(60)</sup> ましてや瞿秋白の残した著作（著訳）は、単なる紹介として考えても、当時の中国にあつては「先端的」な業績だったに違いない。これらの仕事が、彼自身が表面的に示している卑下とは別に、中国マルクス主義思

想界で持った役割や影響という点については、次章で検討することにした。

注

- (1) 《瞿秋白論文集》目録、(《瞿秋白論文集》自序)付録、《近代史研究》一九八一年第二期(一九八一年五月)、六一—四頁所収。
- (2) 同前、一二頁。
- (3) 《瞿秋白論文集》自序、前掲誌、四頁。上海大学における三種の講義録が一九三三—三四年の時期の瞿秋白の文筆活動において占める比重の大きさについては、既に前章で指摘した。そして、上海大学時期は言うまでもなく、それ以降の時期を通して見ても、瞿秋白が執筆した社会学・社会科学理論関係の著述の中で、これら「三部作」は分量的にも内容的にも、中心的な位置を占めるものとなっている。
- (4) この二篇は、瞿秋白が翻訳したゴレーフ著《無産階級之哲学——唯物論》(訳書刊行は一九二七年)の「訳者付録」として発表されたものだという(未見)。《唯物論的宇宙觀概説》については、その一部が忻劍飛・方松華編《中国現代哲学原著選》(復旦大学出版社、一九八九年)、二〇三—二〇七頁、に収められている。
- (5) 季甄馥《瞿秋白与普列漢諾夫》、瞿秋白記念館編《瞿秋白研究》(3)(学林出版社、一九九一年一月)、九五—一二三頁、および、《瞿秋白与布哈林》、《馬克思主義研究》一九八九年第一期(一九八九年三月)、二二五—二三八頁。
- (6) 《瞿秋白文集》では、《社会学概論》が「一九三三年」執筆の作品として配列されている(《政治理論編第二卷、三二〇頁》。完成時期についてのより詳細な情報は、今までのところ見当たらない。
- (7) 《上海大学史料》三二五頁参照。《新青年》季刊第三期(一九二四年八月)の巻末広告では、編集母体名は単に「社会科学会」となっている。また《上海大学史料》では、刊行年月は「一九二四年一月」となっているが、瞿秋白文集の編者注によれば、「二一四月」である。《新青年》誌上の広告には、月刊で継続的に発行して行く計画が示されていることから、実際に定期的に刊行されたかどうかは確言できないにしても、一月に四集全てが出版されたものではなさそうである。



- (8) 《上海大学史料》二六八—四二二頁、にその一部分が収録されている。瞿秋白文集の編者注によれば、この六種以外にはなかった《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、三一〇頁。《上海大学史料》では、「社会科学講義」の名称で、上記の四集に収録されている六種以外の講義・講演も収められており、瞿秋白のものとしては、上記の二種の他に、《社会科学概論》と（正式なスタッフでなくなった後の）一九二六年に上海大学で行なった講演《現代民族問題講義》とが含まれている。だが、《社会科学概論》は、上海大学の正規のカリキュラムとは別の、サマー・スクールにおける講義として一九二四年七月に講じられ、同年一〇月に上海書店から単行本として出版されたものである。したがって、《現代民族問題講義》と同様、上海大学に関連する活動から産み出された著述であった点では、共通性を持っているのは事実であるが、正確に言うならば、上記の二講義とは性格を異にすると考えよう。
- (9) 周永祥《瞿秋白年譜新編》（学林出版社、一九九二年）、一一三頁。楊之華の回想記の日本語訳の訳注にも同様の記述がある。新島淳良訳「回想の瞿秋白」、新島淳良・松井博光編『革命回想録』（中国の革命と文学 一〇、平凡社、一九七二年）、八頁。
- (10) 前掲《新青年》季刊第三期の卷末広告。
- (11) 大学の教室における実際の講義は、これらの講義録と完全に一致するとは限らず、活字になった以上のものが準備されていたかも知れない。
- (12) 「一 唯物哲学与社会現象」の「総論」の末尾に、講義の進め方に関して次のような記述がある。「従つて、社会哲学——現代の社会の総合的觀察及び将来の社会の探求——は、(一) 先ず哲学上の宇宙根本問題の研究から始め、(二) 繼いで社会現象の秘密を分析し、(三) さらに社会主義の解説に進む、べきである。」《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、三四〇頁。傍点は原文。(一)、(二)がそれぞれ現行テキストの「哲学」、「経済」部分にあたるものであろう。
- (13) 丁守和《瞿秋白思想研究》（四川人民出版社、一九八五年）、一二七頁。もっとも、この点については、統一された共通知識として定着していない傾向が見受けられる。前章で挙げたものその他、依拠文献に言及することなく瞿の《社会哲学概論》を扱っている主だった論著としては、莊福齡主編《中国馬克思主義哲学传播史》（中国人民大学出版社、一九八八年）、一九五—一九六頁、がある。
- (14) <Предисловие>, А. Деборин, Введение в философию диалектическо-го материализма (序文)「アー・デボーリン『弁証法的唯物論哲学への入門』」。デボーリンの『入門』

は一九二六年出版。日本語訳に、井上満訳『弁証法的唯物論哲学への入門』（白揚社、一九二七年）がある。ブレハーノフの序文は一九一五年に執筆されている。なお、瞿秋白の〈社会哲学概論〉の「緒言」部分が、ブレハーノフのこの文章に基づくものであるという事実については、すでに拙稿「研究ノート」タールハイマー『古代中国哲学』および葉青『中国上古哲学史』——『唯物論／観念論』史観による中国哲学把握の淵源をめぐって（『中国——社会と文化』第一号（一九八六年六月）、一〇四頁）で簡単に指摘している。

- (15) 前掲〈瞿秋白与普列漢諾夫〉ただし、季氏は、〈社会哲学概論〉の「緒言」とブレハーノフの文章との関連には、言及していない。
- (16) David Joravsky, *Soviet Marxism and Natural Science, 1917-1932*, London: Routledge and Kegan Paul, 1961, p.17.
- (17) サミュエル・H・バロン著、白石治朗他訳『ブレハーノフ——ロシア・マルクス主義の父』（恒文社、一九七八年）四七二頁参照。
- (18) 田中真晴『ロシア経済思想史の研究——ブレハーノフとロシア資本主義論史』（ミネルヴァ書房、一九六七年）一一二—一一三頁。
- (19) 前掲井上満訳『弁証法的唯物論哲学への入門』所収の訳者の「緒言」を参照。緒言四頁。
- (20) 同前訳書、二一三頁。
- (21) 同前、二二—二七頁。
- (22) それぞれの部分は、『瞿秋白文集』政治理論編第二巻の以下の箇所該当する。①三二〇頁二行目—三二一頁四行目、②三二一頁一—行目—二三行目、③三三二頁一〇行目—一八行目、④三三三頁一六行目—二三行目、⑤三三三頁二四行目—三三三頁二—三行目。
- (23) 同前、三三四頁。
- (24) プレハーノフ『マルクス主義の根本問題』（恒藤恭訳、『世界大思想全集』社会・宗教・科学思想篇第一四巻（河出書房、一九三五年）、三二—三八頁。
- (25) 注(12)に引用した記述から見れば、瞿秋白は「社会主義」についての章を予定していたはずである。その場合、これが

『反デューリング論』の「第三篇 社会主義」に対応するものとなる。

「唯物哲学与社会現象」部分の『反デューリング論』等との対応関係の概要は左表の通りである（『反デューリング論』および『家族、私有財産および国家の起源』の該当ページは、国民文庫版のものである）。

唯物哲学与社会現象 〔総論〕		序説：一 総論、三―三頁 第三篇 社会主義：一 歴史の概説、四六七、四六八―四七〇、四八〇頁 序説：一 総論、二四―二五頁 （一部不明） 序説：一 総論、二五―二六、三一―三三、三四―三五頁 （一部不明）
第一 哲学	一 宇宙之源起 （不明）	第一篇 哲学：7 自然哲学 生物界、二三、二〇三、二〇四、二〇七―二〇九頁 （一部不明）
二 生命之発展	三 細胞——生命之歷程	第一篇 哲学：8 自然哲学 生物界（結び）、二七、二四、二五―二六頁
四 実質与意識	第一篇 哲学：3 分類 先天主義、五、四頁 プーハーリン『史的唯物論』第三章 弁証法的唯物論、五―六〇頁 第一篇 哲学：3 分類 先天主義、五、五頁	第一篇 哲学：3 分類 先天主義、五、五頁

五 永久的真理——善与悪	第一篇 哲学：9 道德と法 永遠の真理、一四一—一四五頁
六 平等	第一篇 哲学：10 道德と法 平等、一五一—一六四頁
七 自由と必然	(不明)
八 互変律	第一篇 哲学：12 弁証法 量と質、一六六—一七七頁
九 数と質——否定之否定	第一篇 哲学：12 弁証法 量と質、一九頁
第二 經濟	第一篇 哲学：13 弁証法 否定の否定、二〇、二三、三八頁
一 社会的物質——經濟	第二篇 經濟学：1 対象と方法、二九七、三〇三、三二三頁
二 原始的共產主義及私産之起源	『家族、私有財産および国家の起源』、二四—二五、三〇—三二、三八—三四頁
三 階級之發生及發展	第二篇 經濟学：4 暴力論(結び)、三四六、三四八—三四五頁 2 暴力論、三〇—三三、三三—三五頁
四 分工	第三篇 社会主義：3 生産、五七—五九、五三頁
五 価値的理論	第三篇 社会主義：4 分配、五〇、五二、五三—五五頁
六 簡單的与複雜的労働	第二篇 經濟学：6 單純労働と複合労働、三三頁
七 資本及余剩価値	第二篇 經濟学：7 資本と余剩価値、三九—四〇頁

(27) この点で、丁守和が「エンゲルスの『反デューリング論』の思想を概括的に紹介」したものと捉えているのは、「緒言」を除いて考えるならば、ほぼ正当である。前掲書、一二七—一二八頁。

(28) 《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、三三七—三三八頁。傍点は原文。

(29) 『反デューリング論』(国民文庫版、村田陽一訳、大月書店、一九七〇年)、三五頁。また三〇一頁も参照。

(30) 同様の表現と発想は、『赤都心史』の「四八 新的現実」にも見える。《瞿秋白文集》文学編第一卷、二四六—二四八頁。もっとも、「べき」と「である」を対比させる文章は、莊福齡によれば、前掲のゴーフ(B. N. Gopbe、一八七四—?)

《無産階級の哲学——唯物論》の付録〈科学之対象——社会〉にも現われていることがわかる。前掲書、二〇二頁。瞿の思想とゴレーフとの関りについての考察は、後日を期したい。

(31)

《瞿秋白文集》では、《現代社会学》は「一九二四年二月」の作品として配置されているが、その根拠は示されていない（政治理論編第二卷、三九五頁）。この説が正しいとすれば、《社会科学講義》の刊行との関連では、《現代社会学》は少なくともその第一集には掲載されていないことになるわけだが、現時点では確認することができない。なお、《瞿秋白著訳系年目録》（一九五九年）も、「年表」を根拠として、「一九二四年二月」説を採っている。

(32)

プハーリン『史的唯物論』（佐野勝隆、石川晃弘訳、現代社会学大系第七卷、青木書店、一九七四年）。『史的唯物論』が《現代社会学》の種本であることについては、莊福齡主編、前掲書、一九〇頁、に既に指摘がある。一方、丁守和の記述はこの点では誤っている。前掲書、一三一頁。

瞿秋白の《現代社会学》とプハーリンの『史的唯物論』の対応関係を表にすると以下のようになる。

	《現代社会学》		『史的唯物論』
	第一章 社会学之对象及其与其他科学的關係		
	第一節 社会学之对象		なし
	第二節 社会学存在之根拠		
	一—五		なし
	六 社会学与其他社会科学		序章 社会科学の实践的意義
	第二章 社会科学之原因論与目的論		5、社会諸科学と社会学
	第三章 有定論与無定論	I	社会科学における原因と目的（因果論と目的論）
	第四章 社会現象之互弁律	II	決定論と非決定論（必然性と自由意志）
	第五章 社会	III	弁証法的唯物論
		IV	社会

- (33) 例えば、①については、《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、四一三、四一四頁、②については四二二、四二三頁に見える。
- (34) 同前書、四一三頁。プハリーンの記述は、前掲訳書、一六頁。
- (35) スティーブン・コーエン著、塩川清明訳『プハリーンとポリシエヴィキ革命——政治的伝記、一八八八—一九三八年』（未來社、一九七九年）、一四七—一五〇頁。
- (36) 同前書、一五五頁。
- (37) 中国の研究では、そもそも《現代社会学》の第一章をあまり重視していないように思われる。例外は、社会学の角度からの研究であるが、その場合でも、単に瞿秋白が記述している内容の概要を紹介しているに止まっている。呉曉迪《瞿秋白与社会学》、《社会》一九八三年第三期（一九八三年六月）、七頁。
- (38) 《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、三九六—三九七頁。
- (39) 瞿が明示して引用している文献としては、後述のソローキンの著書の他に、エルウッド (Ellwood) の著作の中国語訳《社会心理学》があるが、これについては未確認である。
- (40) Sorokin, *Contemporary Sociological Theories*, New York: Harper & Brothers, 1928. 記述が酷似している例としては以下の点がある。瞿秋白が引用しているヘルギーの社会学者ソルヴェー (E. Solway) の論文は「ソローキンが例示しているものと同じである (p. 20)。瞿がソルヴェーの文言として扱っている記述（「あらゆる協力は『力の組み合わせであり、社会闘争は『力の競い合』であり、社会組織は『力の均衡』である』というくだり）は、ソローキンの引く所には該当する箇所がないが、これは実は、ソローキンの書物ではヴォロノフ (Voroff) の言葉として引用されている文言なのである (According to Voronoff, association and cooperation are “addition and multiplication of forces”; war and social struggle, “subtraction of forces”; p. 17)」。また、ハレー (Harel) からの引用（「個人の総力は彼の地盤の中にある。あらゆる形式の変化が起ることも終始変わることがない。」という記述、および個人を物質点と考え、環境を「力の地盤」と考える、という表現）についても、ソローキンの著書に全く同じ引用文を見出すことができる（“The total energy of an individual in his field of forces remains constant throughout all its modifications.”; pp. 17—18、q. 4. 5 The individual is transformed into a material point, and his social environment into “a field of forces.” (chammp de force).; p. 17)」。《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、四〇〇—四〇一頁。

- (41) 〈現代中国所当有的「上海大学」〉、《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、一三〇頁。
- (42) 前掲「プハーンとボリシェヴィキ革命」、一五一頁。
- (43) 韓明漢は瞿の社会学観について、マルクス主義社会学とブルジョア社会学とを区分していない点および一九世紀以来の「百科全書」式の社会学の範囲を出ていない点を指摘しているが、彼が依拠している文献は〈現代中国所当有的「上海大学」〉のみである。韓明漢《中国社会学史》(天津人民出版社、一九八七年、五一—五二頁)。
- (44) 《社会科学概論》の発表・刊行時期については、注(8)を参照のこと。
- (45) 王観泉《一個人和一個時代——瞿秋白伝》(天津人民出版社、一九八九年)、一三六頁。
- (46) 一般的には、「唯物弁証法」、「政治経済学」等の授業名が挙げられており、瞿自身の後年の回想記でも、東方大学の課程の通訳を務めた記述の中で例示されている具体名は「経済学」や「唯物史観哲学」等々であって、東方大学でのテキストに関する言及はない。王観泉、同前書、一三四頁。陳鉄健《瞿秋白伝》、一三六一—一三七頁。瞿秋白〈多余的話〉、《瞿秋白文集》政治理論編第七卷、七〇五頁(丸山昇訳、八六頁)。
- (47) 瞿秋白の論は、《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、五九三—五九四頁。ブレハーンノフの図式は、前掲『世界大思想全集』版、三五八—三五九頁。この点については既に、前掲季甄馥〈瞿秋白与普列漢諾夫〉、一一〇頁に指摘がある。
- (48) 前掲『史的唯物論』、一八三頁。また、季甄馥氏は、《社会科学概論》の第六章「道德」の冒頭で瞿秋白が「社会心理」と「社会思想」について論じている点を、ブレハーンノフにはなかった明確化と捉えている(前掲〈瞿秋白与普列漢諾夫〉、一〇九頁)が、この二項目も、プハーンが「社会心理と社会的イデオロギー」と題して、当該の章で取り上げている。『史的唯物論』二六五—二七五頁、および二六四頁。
- (49) 前掲季甄馥〈瞿秋白与布哈林〉でも、具体的な類似点は明らかにされていない。
- (50) Kenneth M. Jensen, *Beyond Marx and Mach——Philosophy of Living Experience*, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1978. p. 1. S.V. Utechin, "Philosophy and Society: Alexander Bogdanov," in Leopold Labedz(ed.), *Revisionism: Essays on the History of Marxist Ideas*, London: George Allen and Unwin Ltd., 1962. pp. 117—125.
- (51) ボグダーノフ『社会意識学概論』(林房雄訳、白揚社、一九二七年)一二九—一三〇頁。『史的唯物論』二二二頁。《瞿秋白文

集》政治理論編第二卷、五七八―五七九頁。

(52) 《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、五四九頁。プレハーノフについては、前掲田中真晴『ロシア経済思想史の研究』三二三頁、を参照。『史的唯物論』一四二頁、一六五頁。『社会意識学概論』四四―四五頁。

(53) 《社会科学概論》での当該の論は、《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、五八六頁、五九〇―五九三頁。人間労働の中での「執行者」の「組織者」に対する従属から、「精神的貴族」と「精神的平民」関係を前提とする「権威主義的思考」が生まれるという、ボグダーノフの主張については、中村裕「ボグダーノフとポリシェヴィズム」、「ロシア史研究」第三八号（一九八三年一月）、四五―四六頁、を参照。なお、直接《社会科学概論》と結び付くかどうかは検討の余地があるが、瞿秋白がボグダーノフにも目配りをしていたことは明らかである。瞿は、モスクワ滞在を終える時期の出来事を述べた文章の中で、ボグダーノフの『経済学講義』の出版に関するロシアの少年との会話に触れており、彼がこの書物を手にしていたことがわかるからである。《赤俄之帰途》（一九三三年一月二五日）、《瞿秋白文集》政治理論編第一卷、四二〇頁。

(54) 《科学与人生觀》（亜東図書館、一九三三年）のための陳独秀の序文は、《新青年》季刊第二期にも瞿秋白の文章と並んで掲載されている。

(55) 《瞿秋白文集》政治理論編第二卷、二九四頁。

(56) 《自由世界与必然世界》とこれらの原典との対応関係の詳細は、以下の通りである。

第一節「自然現象及社会現象之規律性」	『フォイエルバッハ論』の四（国民文庫版、五九―六二頁）
第二節「自由与必然」	『反デューリング論』第一篇（『道德と法』）の二一（『自由と必然性』）の一部（国民文庫版、一七五―一七六頁）
第三節「歴史的必然与有意識的行動」	『反デューリング論』第三篇（『社会主義』）の二（『理論的概説』）（国民文庫版、五〇六頁）
第一段落	『マルクス主義の根本問題』
第二段落以降	『世界大思想全集』版、三二六―三六七頁、三二九頁



- (57) 《瞿秋白文集》、政治理論編第二卷、六一九—六二七頁。
- (58) 前掲井上満訳『弁証法的唯物論哲学への入門』、四六七—五〇六頁。「プラグマチズムと唯物論」は、①プラグマチズムの興起とそのロシアでの普及の社会的・思想的背景、②プラグマチズムの理論内容の分析および批判、③まとめ、に区分でき、②が約三分の二を占めている。抽象的・スコラ的な論述を省略しているために分量的にはかなり圧縮されているが、瞿秋白が利用している箇所は、この第二部分の前半、およそ中間部分までの所に該当する。井上満訳では、理論的内容についての記述は四七三頁から四九八頁一行目までであるが、瞿の文章で使われているのは、そのうち、四七三頁—四八六頁六行目である。出だし部分からの利用は、井上訳で四六九頁三行目、および四七一頁から四七二頁にかけての記述などである。
- (59) 一九二〇年代前半のソ連マルクス主義哲学におけるデボーリンの位置については、David Joravsky, *op. cit.*, pp. 84—85, 121, 124, 171, に拠る。
- (60) 瞿秋白〈多余的話〉、『瞿秋白文集』政治理論編第七卷、七〇五頁。
- (61) この点に関連して、「理論的な研究は科学的社会主義に重きを置くが、魂の栄養は神秘的『ロシア』によって陶冶されると断言できる」(『餓郷紀程』一六、『瞿秋白文集』文学編第一卷、一〇四頁) という瞿秋白の言葉が想起されよう。